

じょうこうじ

掟光寺だより

令和6年
4月号

行事案内

●4月9日(火)
「宗祖報恩講」

13時30分から



四十九日について

【四十九日とは】

四十九日とは、生き物が亡くなったから生まれ変わるまでの期間を指します。俗では「冥途の旅」と言うことが多いですが、仏教では前世と来世の中間の存在の期間と云うことで「中有・中陰」ともいいます。

仏教が生まれたインドでは生き物は亡くなったなら終わりではなく、亡くなった生き物は「生まれ変わり死に変わりを繰り返す(輪廻)」と考えられており、仏教もその考えを引継いでいます。これのちにさらに考えが進んで「亡くなってから生まれ変わるまでは一定の期間がある」と考えられるようになりました。これが「四十九日」です。

四十九日の法要が行われた始まりは定かではありませんが、9世紀頃、中国敦煌で見つかった写本に、亡母の供養のために初七日から四十九日までの七日毎に写経をしたものが残っており、少なくともこの時代には行われていたことがわかります。日本では、平安時代より定着したといわれています。

【なぜ四十九日?】

亡くなってから生まれ変わるまでの期間を四十九日とするのはインド仏教以来の説ですが、仏教内でも様々な派閥があり、その期間

について諸説あります。大まかに次の4つです。

- ① わずかな時間で生まれ変わる
- ② 四十九日で生まれ変わる
- ③ 最短七日で生まれ変わる
- ④ 特に期間は決まっていない

日本では、主に②と③の説が主流となりました。

③は、最短で亡くなってから七日で生まれ変わるが、ダメだった場合は次の七日後：というように繰り返され、最終的に四十九日までの期間には生まれ変わるといえるのです。現在、初七日の法要が四十九日に次いで大切にされますのはこの説によるものです。

また余談ですが、「亡くなったあと四十九日の間、線香を絶やさず」とよく言われますが、これは古来から亡くなったあと四十九日の間はガンダルヴァ(乾闥婆)と呼ばれる仏教を守護する神の状態で存在していると考えられ、このガンダルヴァが香りを食事とすることから、ガンダルヴァの霊にお香を食べると考えられたためです。



【四十九日に法要をする理由】

亡くなった人が、来世どのような境遇に赴くかは基本的に生前の行いによるとされます。四十九日の間ははまだ未確定な状況にあることから、少しでも亡くなった方の来世の境遇が善くなることを願って行われるのが、初七日から四十九日までの法要です。

亡くなった人は、以下の六つの行き先のいずれかに赴くと説かれます。

- ① 責苦を受ける地獄の世界
- ② 飢えと渇きに苦しむ餓鬼の世界
- ③ 畜生(動物)の世界
- ④ 争いの絶えない修羅の世界
- ⑤ 我々のいる人の世界
- ⑥ 楽に満ちた天上の世界

いずれの世界に生まれ変わっても、そこに居続けるわけではなく、寿命を全うすると、またいずれかの世界に輪廻する

また「閻魔大王などの裁判を受けるため、この世から故人を応援する」という考えは中国で仏教と道教の思想が習合した「十王信仰」から来ているものです。